

2025年1月21日

副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第1回（通算第21回）

第四章——浄土の慈悲（1）

加来 雄之

（1）第Ⅲ期にむけて

第Ⅲ期では、『歎異抄』本文の第四章から第六章までをともに学びます。

先人は、第四章以降を、第三章までの安心（あんじん）についての訓えと区別して、起行（きぎょう）を表わす訓えと位置づけています。起行とは、安心にもとづいた生活を意味します。とくに第四章から第六章には、安心に立つもの（ただ念仏する者）がどのように他者に関わるのかについての仰せが記されています。

たとえば、慈悲とは念仏していそぎ仏になって衆生を利益することである（第四章）、親鸞は父母の孝養のために一返も念仏したことはない（第五章）、親鸞は弟子を一人ももっていない（第六章）など、他者との関わり方を問い直してくる印象的な語りが出てきます。

この第Ⅲ期での学びを、私たちの自我関心に立った他者との関わり方（応答）を問い直す機会にできればと思っています。

つまり、どこまでも安心訓によって教えられた、「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」（第一章）、「いずれの行もおよびがたき身」（第二章）、「煩惱具足のわれら」（第三章）という人間観、もしくは自覚に立って、他者との関係を確立する地平を問い直すことを主題とするのが第四～六章であるといえます。

そのとき、いわゆる聖道を歩む強い存在（聖、賢、菩提心などいわゆる男性的なイメージ）によって指示される他者関係とはまったくことなる光景が展開することになるでしょう。

その他者関係は、私の意図や能力・努力によって実現するものではないこと、如来の自然のはたらきによることが強調されることとなりますが、しかしそのことは意識しなくてもよいとか、応答する責任はないということではありません、むしろ自覚的に、如来による摂取不捨という人生の意味に参与する存在となることなのです（摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり）。これらの確かめを通して、浄土真宗のすくい、個人的な心情にとどまるものではなく、他者との関係性の回復であることを確かめてみたいと考えています。

主としてですが、第四章では、慈悲を手がかりとして、聖道門と浄土宗との立場を確かめることになり、第五章では、孝養父母を手がかりとして、還相回向の問題をとりあげることになり、第六章では、師弟関係を手がかりとして、自然のことわりをあきらかにするという課題に取り組むことになると思います。

(2) 安心訓と起行訓

いわゆる師訓篇十章のなかの第三章と第十章におかれた二つの「おおせそうらいき」という締め語が、師訓十章の内容が二つの主題（安心訓三章と起行訓七章）から成っていることを示している。

安心訓は、安心を「ただ念仏」による「ただ信心」の内容として明らかにし、起行訓は、その安心において実現する「ただ念仏」の生活について明らかにする。

起行訓一第四～九章 「ただ念仏」の起行についての訓え—他者と自己

第四・五・六章は、念仏者が他者と関るあり方について…社会・空間・世界

第七・八・九章は、念仏者に実現する求道の歩みについて…人生・時間・歴史

第十章 起行訓についてのまとめ

・『歎異抄』の背景にあるのは、善導・法然を通して確かめられた『観無量寿経』の教え（顕彰隠密の義）である。

・第四・五・六章の背景としての三福の中の「世福」

『観無量寿経』に説かれる往生のための三福、そのなかの世福が第四・五・六章の背景にあるとされる。

かの国に生まれんと欲わん者は、当に三福を修すべし。

一つには父母に孝養し、師長に奉事し、慈心ありて殺せず、十善業を修す。

二つには三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯せず。

三つには菩提心を発し、深く因果を信じ、大乘を読誦し、行者を勧進す。

かくのごときの三事を名づけて浄業とす。

仏、韋提希に告げたまわく、「汝今知れりや不や。此の三種の業は、過去・未来・現在、三世の諸仏の浄業の正因なり。」

（『観無量寿経』上品上生、『聖典』初版、九五頁）

又、決定して深く「釈迦仏、此の『観経』に三福九品・定散二善を説きて、彼の仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕せしむ」と信ず。

（信巻引用、善導『観経疏』散善義、『聖典』216頁）

『観無量寿経』に、阿弥陀仏の国に生まれるために修する福德として「三福」が説かれ、それが「三世の諸仏の浄業の正因」とされている。それぞれ世福、戒福（仏の決められた戒律をまもる）、行福（大乘の自行化他の善根）と呼ばれる。戒福・行福が宗教的行であるのに対して、世福は世俗的な道德ということが出来る。戒福、行福と世福との関係はどのように考えればよいだろうか。

善導は、『観無量寿経』に顕彰隠密の義を見出し、三福の教説が「人をして忻慕せしめる」ためであると説いている。そのことを見失うと、三福の修善に取られることとなる。『歎異抄』の第四・五・六章は、「ただ念仏」の立場から、とくに世福の自力的な受けとめ方を問い直し、他力としての他者への関わり方を示す教えである、と一応、言うことができる。

・藤秀翠『歎異抄講讃』（1933年）

「〔第〕四・五・六章は、〔第〕三章までの信仰が生活の相をとって表現される。生活は対人関係を予想するので、われと衆生の対人関係をとりあつかう。とくに四章は、最も広い意味におけるわれとわれらの問題をかたる。」

（藤秀翠『歎異抄講讃』、百華苑、286頁要旨）

・曾我『歎異抄聴記』（1947年出版、1942年真宗大谷派安居の記録）

「はじめの第三条までは主に念仏の安心として御教訓を述べ、第四条以下は起行について述べる。そのなかに第四・五・六条は大体念仏の利他の徳を、第七・八・九条は念仏の自利の徳をあらわし、それを結んで、念仏には義なきを義とすといふと了祥師は考える。」

ただ曾我は、同時に、

「学者というものは、ものを便宜上まとめていくものであるから、ものをおぼえるにつごうのようように、便宜上、科文をつくる。しかしへたにつくるとないほうがよい場合もある。……これは自利だからどこまでも自利であるとする。学問をへたにすれば学問の縄でしばられることになる。」

（『歎異抄聴記』真宗文庫、東本願寺、一九九九年、198頁）

と、了祥の科文をあげながら、科文については注意を促している。

「わたくしは『歎異抄』では、第一章が真実教を明らかにしたものであると思うようになりました。そうしてみると、第二章は真実行であり、第三章は真実信、第四章は真実証であると思います。それから第五章は還相回向だと思えます。ですから、はじめの五章で教・行・信・証から還相回向までを明らかにされたものであると、こういうようにこのごろ考えるようになりました。」

（曾我量深「改版の序」『歎異抄聴記』真宗文庫、東本願寺、一九九九年、[ii頁]）

・加来案第四～六章 対他（関係性としての存在をどのように意味づけるか）

第四章 関係性としてのいのち（一切衆生）

第五章 父母が象徴するのは宿業としての存在一生（身としてのいのち）

第六章 師弟が象徴するのは言葉としての存在一命（ことばとしてのいのち）

(3) 浄土宗における他者への関わり方（利益衆生）

・源空聖人のことば

「あながちに信ぜざらん人をば、御すすめ候べからず。かかる不信の衆生をおもえば、過去の父母・兄弟・親類もおもい候にも、慈悲をおこして、念仏かかて申して極楽の上品上生にまいりてさとりをひらき、生死にかえりて誹謗不信の人をもむかえんと、善根を修してはおぼしめすべき事にて候也。このよしを御こころえあるべきなり。」

（『西方指南抄』、『定本親鸞聖人全集』輯録篇、361-362頁）

「とくとく浄土にむまれて さとりをひらきてのち いそきこの世界に返りきたりて 神通方便をもて 結縁の人をも無縁のものをも ほむるをもそしるをも みなことごとく

浄土へむかへとらんとちかひをおこして」

(『拾遺語灯録』巻下「御消息第三」、『昭和新修法然上人全集』576頁)

・聖覚『唯信鈔』

「それ、生死をはなれ、仏道をならんとおもわんに、ふたつのみちあるべし。ひとつには聖道門、ふたつには浄土門なり。聖道門というは、この娑婆世界にありて、行をたて功をつみて今生に証をとらんとはげむなり。……まことにこれ大聖をさることとおきにより、理ふかく、さとすくなくがいたすところか。

ふたつに浄土門というは、今生の行業を回向して、順次生に浄土にうまれて、浄土にして菩薩の行を具足して、仏にならんと願するなり。この門は末代の機にかなえり。まことにたくみなりとす。ただし、この門に、またふたつのすじ、わかれたり。

ひとつには諸行往生、ふたつには念仏往生なり。

諸行往生というは、あるいは父母に孝養し、あるいは師長に奉事し、あるいは五戒・八戒をたもち、あるいは布施・忍辱を行じ、乃至三密・一乗の行をめぐらして、浄土に往生せんとねがうなり。これみな往生をとげざるにあらず。一切の行はみなこれ浄土の行なるがゆえに。ただ、これはみずからの行をはげみて往生をねがうゆえに、自力の往生となづく。行業、もしおろそかならば、往生とげがたし。かの阿弥陀仏の本願にあらず。摂取の光明のてらさざるところなり。

ふたつに念仏往生というは、阿弥陀の名号をとなえて往生をねがうなり。これは、かの仏の本願に順ずるがゆえに、正定の業となづく。ひとえに弥陀の願力にひかるるがゆえに、他力の往生となづく。」

(聖覚『唯信抄』聖典 016-917 頁)

『歎異抄』第四章 浄土の慈悲

(1) 原文と安良岡訳

<p>第四章（蓮如書写本）</p>	<p>（安良岡康作『歎異抄全講読』、一一七頁。原文には直接見出すことができない訳文については〔 〕を付した。また訳として検討したい箇所を<u>下線</u>で示した。）</p>
<p>四 一 ①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。 ②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。 ③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。 ④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。 ⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。 ⑥しかれば念佛まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云々。</p>	<p>一 ①〔仏道の〕慈悲には、聖道〔門〕と浄土〔門〕との<u>相違する所</u>がある。 ②聖道門の慈悲というのは、〔この現世において、〕<u>人</u>をかわいそうに思い、いとおしみ、守り育てることである。 ③そうではあるが、〔自分の〕思い通りに、終りまで助け通すことは、この上なくむずかしいことだ。 ④〔一方、〕浄土〔門〕の慈悲というのは、〔この世では〕念仏し、<u>浄土に往生すれば、</u>速やかに仏と成って、<u>広大な慈悲の心</u>をもつて、思い通りに、あらゆる生き物に<u>福利を授ける</u>ことだと言ってよいのである。 ⑤この世に生きている間は、どんなに、かわいそうだ、同情すべきことだと思っても、思い通りに助けることが困難なのだから、<u>この〔聖道門の〕慈悲には、結末がつかないのだ。</u> ⑥だからして、<u>〔私たちにとっては往生のために〕</u>念仏申すことだけが、終局まで貫徹する〔如来の〕<u>広大な慈悲の心</u>〔にかなうこと〕なのであります。 ……</p>

【永正本との校訂】 とくにナシ。

(2) 第四章の構造

・妙音院了祥『聞記』は大きく総別の二段落に分け、別をさらに三段に分ける。

念仏大悲 二

初、總示慈悲別 …①慈悲に

二、別示 三

初、聖道慈悲 二

初、示其体…②聖道の

二、示其劣…③しかれども

二、浄土慈悲 二

- 初、示其体…④浄土の
- 二、示其勝…いそぎ仏に
- 三、結成勝劣 二
 - 初、示聖道劣 …⑤今生に
 - 二、成浄土勝 …⑥しかれば

(妙音院了祥『歎異抄聞記』)

・加來の理解

- ①は、主題の提示
- ②③は、「聖道の慈悲」について
- ④は、「浄土の慈悲」について
- ⑤⑥は、「かわりめ」について

(3) 第四章を受けとめるとき視座の確かめ

・石田瑞麿による批判

「念仏していそぎ仏になりて」とあることである。念仏によってこの身のままで仏になるような即身成仏がここで意図されえないかぎり、「いそぎ仏にな」るには往生しか道はなく、しかも往生は死後のことである以上、急ぎ死ぬことが念仏者にとって、望ましいことになる。いわば、念仏者は死にいそぐことによって、浄土の慈悲を達成できるかのような表現になっているからである。はたして、親鸞は「いそぎ仏になり」たいと考えたことがあったのだろうか。」

(石田瑞麿『歎異抄 その批判的考察』八六頁)

・藤秀翠の自問自答

「さういふ回り遠い浄土の慈悲なるものが、今日の活きた社会とどういふ関係交渉をもち得るであらうか。浄土へまいて仏の位に登ってからでなければ社会にはたらきかけられないやうな慈悲は、いかに大慈大悲心であらうとも、われわれの現実生活とはあまりに懸けはなれた考へではなからうか。むしろ体裁よく現実の世界から逃避するものではないか。さういふ「夢」を吸うて生きるには現代人はあまりに切迫した事情の下に喘いでいる。さういふ夢のやうな「浄土の慈悲」をすてて、たとへ出来ないまでも現実につよくはたらきかける「聖道の慈悲」に始終するのが本当ではあるまいか。」(藤秀翠『歎異抄講讃』290頁)

「浄土の慈悲を礼賛することは、現実の世界からの逃避ではなく、現実の世界に出ずる唯一の道であった。／きわめてありがたしとは、空言を弄するのではなく、本当に聖道の慈悲に絶望した人の声である。ここに立場を転じなくてはならないことを強く意識する。」

「念仏もうさんとおもいたつところは、一面には如来の大心にいよいよ深く帰入するところであり、一面には如来の大心を背負うて現実界に出でんとするところである。人生に対する厳粛な態度、現実界の上に活動する如来心に参与する唯一最高のところである。」(藤秀翠『歎異抄講讃』294-295要旨)